大地

23号
1994. 3. 15
真宗大谷派 浄国寺
☎23　5724

雪ふりつむ

山崎隆昌

本年の賀状に次の詩を記して、新しい年を迎へるメッセージを託しました。

太郎を眠らせ
　太郎の屋根に雪ふりつむ
次郎を眠らせ
　次郎の屋根に雪ふりつむ
（『三好達治詩集』より）

冬になると何かしらこの詩を思い出します。わずか三十字余の短かい詩でありますが、口遊むたびに心温まるものを感ずるのです。夜中に雪が降りつづいた日の朝は全てが雪に包みこまれ、厚く雪に埋もれます。白く化粧した雪景色に〝ああ雪ふりつむ〟と思うのです。

雪がしんしんと降りつづきます。雪深い頸城野の地に生活するものにとって、冬と雪は同じ意味を持ちます。雪は冬そのものです。

子どものころ、雪の積もった早朝の道つけはとても嫌なものでした。ふうふう雪を踏み進む時、何と隣家が遠くに感じたことか。

しかし時代とともに、特にあの三年続いた豪雪から、雪との付き合い方もずい分変ってきました。高床の家々、機械による道路の除雪、シャベルからスノーダンプへの移り、防寒衣類の変化など驚くばかりです。

この変化は、雪が生活にのしかかる重みを少しづつ除いてくれました。

雪がしんしんと降りつづきます。三好の「雪ふりつむ」の詩で心をうたれるのは、太郎の屋根があり、そして次郎の屋根のあることです。当然に三郎の屋根があり、四郎の屋根があり、生命ある一つ一つに屋根があることです。屋根を持たない生命はありません。その一つ一つの屋根に〝雪ふりつむ〟のです。

雪の付き合いの変化は、雪の重みを取り除いてくれましたが、同時にそれは失なってはならない大切なものまでも奪い取りつつあるのではないかと恐れるのです。

温かな子どもの詩があります。題は『雪』。

雪　　石井敏雄

雪がコンコン降る
人間は
その下で暮しているのです。
（『山びこ学校』より）

この詩は児童文学者の灰谷健次郎の本を読む中で教えられました。

この詩にも雪とともに暮す人々の優しい息づかいが聞こえます。

昔より、人々は自然の災害に苦しめられ、それと闘って来ました。けれどもそれは人間の営みのほんの僅かに過ぎず、人間は自然とともに生きて来た、あるいは自然の中に生かされて来たといえると思います。

二十世紀の終りに生きる私達は次の世代に、自然の何を伝えようとするのでしょう。便利になった生活の上に胡座する私は三人の子ども達に何を伝えようとするのだろうか。

雪がしんしんと降りつづきます。温かな『雪ふりつむ』の詩が心に広がります。

にがい思い出

山崎慎子

今年もまた、雪の少ない冬になり日一日、日脚を延ばしてそこかしこに春の気配をはこんで来ている。立春も来ないうちに、気の早い和菓子屋さんの店先には、うぐいす餅、さくら餅の看板が目立つようになる。

通りのショウウインドウに、あるいは女の子のいる家々の部屋には、それぞれのお雛様が飾られて、華やかな暖かい雰囲気を醸し出している。

お雛様にまつわる様々な思いと想い出があり、それは嬉しかったり暖かかったり、少し切なかったりするのだが、ひとつだけ心の奥底に、ある疼きを覚えずにはいられない出来事がある。

私の部屋の押し入れの奥には、下絵を画いた二枚の画仙紙が隠されている。それは、立ち雛を画こうとして筆を入れた画仙紙であり、画き手は亡くなった父である。

甲じょう腺ガンに侵されて声を失い何かと不自由を強いられて、再発、再々発を繰り返し常に死と向き合いながらの父の生活は、一日一日が生命を燃焼させながら、同時に〝晴耕雨読〟というにふさわしい穏やかな有り様でもあった。そんな生活のなかで、何時の頃であったろうか。父は孫娘のために、お雛様を画こうと思い立ってくださった。

ある能画家の画いた作品をよそからお借りしてきて製作は早速はじめられたのだったが、一枚、二枚と画き破り、どうやら父自身納得のゆく下絵が画きあげられる頃、どんなものだろう、というようにその作品を示された。

もとより私には絵の素養などはまるでない。ただ感覚的に好きだな、良いな、これは何だかなじめない、とふりわけることぐらいが関の山である。感想を求められた私は何か言わなければならないと少し焦る。けれど良い出すね、きれいですね、というだけではいかにもつまらないのではないかと、ついさかしらに構えてしまう。

それは今から十五年以上も前のできごとだったのだが、今でもここから先を書くのに、あるためらいを覚えずにはいられない。

父がもう決してそれから後、画く気になれない程ひどい言葉を、いとも簡単に私が言ってしまったからである。

「とても可愛くて綺麗ですけど何かこう絵全体に〝品〟のようなものが欠けているような気がします。」

あの時、あの瞬間の父の失意の表情と態度を思い出す度、今でも冷や汗の出る思いがしてしまう。しかも父は、生意気で不躾な私を一言も叱りもせず、非難がましいことを何も言われなかったのだ。そして二度と筆を握ろうとしない程の痛手を私の一言から受けたにも拘わらずその後も、私に対する接し方に何の変化もなかったのである。そのことは私にとって大きな救いではあったが、ある意味では辛さを伴う事でもあった。

よりによって、何と言うことを言ってしまったのだろう。相手が最も打撃を受ける言葉をわざわざよりすぐるように、何てひどいことを言ってしまったのだろう。

品が欠けていたのは、品がなかったのは絵ではなく私の心根の方だったのだと気が付いたのは、ずっと後になってからのことである。

春待つ心が一層募って、さてそろそろお雛様を飾ろうか、と思い立つ頃になるといつも、父との思い出の中で、いちばん苦い辛いこのことを思い出してしまう。

つい、さかしら顔をしたがる私への父の無言、無形のかたみだったのかも知れない、とふと思う。

◇◇ 本の紹介 ◇◇

「リトル・トリー」　めるくまーる　1,854円
フォレスト・カーター　和田穹男訳

「朝の少女」　新朝社　1,200円
マイケル・ドリス　灰谷健次郎訳

「白い道をゆく旅」　人文書院　1,957円
岡　百合子著

「花下遊楽」　弥生書房　1,700円
中野　孝次著

「もうちょっとだけ　子どもでいよう」
理論社　1,600円
岩瀬　成子著

現場から

責　任

数年前のこと、読書好きのYさんが中央病院に入院された。左足が壊疽に患り股部より切断手術するためである。

手術も終り、しばらくしてからお見舞に行った。病院でも相変らずベットの上で静かに本を読んでおられた。Yさんは学者風の容貌で、穏やかな中にも凜としたものを持っておられる。

別れ際、すまなそうに言われた。

「すまんがね、今度文庫本二冊買って来てくれませんか。どんな本かはあなたに任せますから」

「いいですよ、近々にまた」

「じゃあ、この二千円で買って下さい」

「いや、お金は後で頂きます」

その時、Yさんが真顔でこう言われた。

「ダメです。〝お金は後から〟というのは無責任になる場合が多い。お金を渡しておけば一番確かですから」

Yさんから二千円を受け取りながら、その人の人生哲学の一面を知らされたようで嬉しかった。

帳場に宿賃

ある日、昼寝から目覚めたTさんが、事務所へ心配顔でやって来られた。言われるには、

「オレ、どうしちゃったんだいね。お金持たんで泊っちゃったねかね。家のもんに電話してお金持って迎え来るように言ってくんないかね。」

事務員は答えました。「Tさん、大丈夫です。お金は事務所で預っていますよ。」

「またまた、そんなうまいこと言って、ウソついてもダメだわね」

そこで事務員は言いました。

「Tさんホラ、この前娘さんが帳場に宿賃いっぱい置いていかれましたよ。」

Tさん安心した顔で、

「そうかね、よかったでや。」

〝帳場に宿賃〟とは奇妙に説得力がありました。

※私が勤務する特別養護老人ホームには一三五人程の人々が生活されています。当然様々な人がいて色々なことが起こります。勤務して二十年、実に多くのことを教えて貰いました。その一端を紹介してみました。

（隆）

俳句

山崎　睦

枯れ果てし蓮を縫いては鴨行き来

妙高のくっきり見えし寒の入り

降れば憂し降らねば不安越の雪

野仏の頭巾新し雪帽子

雪嫌ひながらも高田去る気なし

ストーブをつけそれよりの厨事

息災に年を重ねて春を待つ

至福の時

山崎昌子

昨年は国際先住民（族）年、そして今年は国際家族年だそうである。だからというわけではないのだが、最近読んだ二冊の本は、それぞれに設定や表現は違っているものの、訴え掛けるテーマの本質が非常に近いと感じた。

まずは、『リトル・トリー』。チェロキー・インディアンの血を引く少年とその祖父母との生活を描いており、その語り口は至って明快、そして力強い。神秘という言葉などで誤魔化されない、実に論理的な自然主義が貫かれているインディアンの生活。決して声高に批判を行うことなく、読み手の胸に深く切りつけてくる。物語の終幕近く、少年リトル・トリーが独り立ち（それは自分の力で生活するなどという生易しいものではなく、本当の意味での「自立」だ）してゆく姿に、唯々沈黙した。

もう一冊は『朝の少女（モーニング・ガール）』。海と太陽、果物、そして家族。なんて素直に子供の言葉で語られているのだろう。なんて美しく飾り気のない言葉で慈しみ合うのだろう。自然が、たとえ嵐さえも、なんて魅力的に描かれていることだろう。シンプルに生きれば余計な悩みも少ない筈…そんな風に考えていた自分の傲慢さを私は知った。そう気付かせてくれるほど、幼い朝（モーニング）の少女（ガール）は、厳格に物事を見極める。限りない幸福感に包まれた物語。その幸福感ゆえに、最後の二頁を読み通すのが、本当につらい。

この二冊に共通して感じたことが、もう一つある。それは「名前」の持つ力である。祖父から小さな木（リトル・トリー）というインディアン・ネームを授かる少年、朝を待ち焦がれて誰よりも早く目覚めるため朝の少女（モーニング・ガール）と呼ばれるようになった女の子。ここで使われる名前は、単に個人を表す符号ではなく、いずれも、愛情を以て相手を理解し、その人となりを適確に言い表した無二の贈り物なのだ。

自己満足の知識でもなく、一瞬の楽しみでもなく、何かを与えてくれる本。そうした本に巡り会う喜びは、やはり得難い幸運なのだと思う。

（本については三面に掲載）